

column

『氷壁』と私

Kunitosbi Isibara 石原 國利

井上靖先生と初めてお会いしたのは、1956(昭和31)年9月の終わりのことであった。私が所属していた岩稜会の会長、石岡繁雄さんが上京し、日本山嶺倶楽部の長越(安川)茂雄さんと会うことになり、私も銀座に呼び出された。お二人は初対面であったが、石岡さんは初登攀の記録である『屏風岩登攀記』、長越さんは安川茂雄の名著『谷川岳研究』で知られ、かねてより文通があった。会うなり長越さんは「作家の井上靖さんが『ナイロンザイル事件』を読んで、あなたたちに会って話を聞きたいと言われている」と言われた。3人はその足で大井滝王子町の井上先生宅を訪ねた。

ナイロンザイル事件の概略は、前年の1955(昭和30)年1月2日、私たち岩稜会の3人パーティが、積雪期末登の前穂高岳東壁の頂上直下で、わずか50センチメートルの滑落でナイロンザイルが切断、石岡さんの実弟若山五朗君(19歳)が墜死し、私ともう1人の友人が生き残った。この冬、私たちと前後して2件、いずれもナイロンザイル切断による遭難が発生していた。これまで使われてきた麻ザイルに対し、新しい素材のナイロンを使ったザイルは、すべての点で優れているとされていただけに、大きな問題となった。3件の事故は、いずれもザイルが岩角に接したところで切断していた。この点に注目した私たちは石岡さんを中心に、名古屋大学工学部と石岡さん宅に作った実験台を使って調べた結果、ナイロンザイルが鋭い岩角に弱いことを確信するに至り、詳細を新聞、雑誌に発表した。

新技術による製品、ナイロンザイル切断事故ということで話題にもなり、専門家も解明に乗り出し、公開実験が行われた。その結果は私たちの発表と違って、ナイロンザイルは岩角にも強い、というものだった。しかし後日、その実験で使われた岩角に細工がされていたことが判明した。私たちは登山者の安全のためにも、公開実験の結果の訂正を求めた。このとき行われた公開実験と、これに関連した一連の出来事をナイロンザイル事件と呼んでいる。

岩稜会は1956年7月これまでの経緯をまとめた『ナイロンザイル事件』を印刷し、登山関係者、報道関係者に送付した。出版社に勤務していた長越さんに送った1冊が井上先生の目にとまったのであった。

井上先生は、石岡さんと私の話を聞いてから「近く新聞に連載小説を書くことになっている。あなたたちの出来事を、小説の材料として使わせて下さい」と言われ、石岡さんと私は協力を約束した。

『氷壁』は朝日新聞紙上に、1956年11月24日から翌年の8月22日まで270回連載された。前穂高岳でナイロンザイルが切断して遭難、ザイルの公開実験で主人公の魚津恭太が不利な立場に立たされる、という全体の筋書きは私たちの経験に即して書かれた。主人公については、長越さんと親しかった登山家松澤明氏の遭難のエピソードをヒントにまとめられた。この遭難は、遺書をもとに発行された『風雪のピバーク』で知られている。

連載に先立って井上先生の取材が始まった。長越さん、石岡さんそして私は連れ立って、あるいはそれぞれ、大井町駅、さらに大井滝王子町まで、省線とバスを乗り継いでうかがいはじめた。「登山のことはわかりませんから、何でも教えて下さい」とおっしゃって、大学ノートに万年筆でメモしてゆかれた。「私は新聞記者をしていましたので、調べるということには苦痛を感じません」とおっしゃる。ものを訊くときの先生は、若輩の私どもに対しても実に丁重で、先生の識ることに対する謙虚なお姿に、私は深い尊敬の念をおぼえた。ときには私の下宿に電話がかかり「今書いたことを読みますから」とおっしゃり、「間違いありませんか」と念をおされた。

お誘いを受けて、ご家族との夕食の卓を囲んだことも、夜晩くなって、車で下宿まで送っていただいたこともあった。その下宿の母屋が数年後、先生の『あすなる物語』の映画で主人公鮎太の住まいとして映し出され、人生における奇しき縁を改めて感じた。

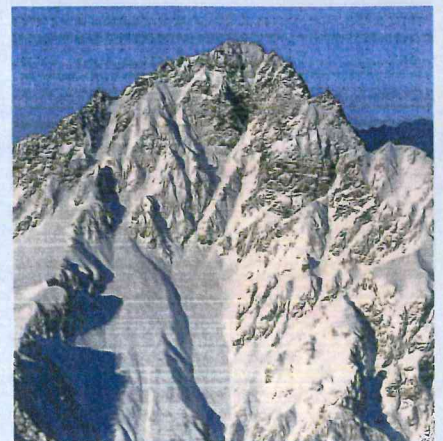
『氷壁』の連載中、私は先生に、公開実験が細工されていたことを書いて欲しいと、訴えたこともあった。先生は「私が書いているのは小説で、ドキュメンタリーとか勧善懲悪ではないのだから」と、困ったような顔をされた。しかし、『氷壁』連載のおかげで、ナイロンザイル事件の存在が広く世に知られることになった。事件として訴えるよりも、作品に取り上げられ、その作品の魅力によって思いもよらない反響を呼ぶ、という貴重な体験を得た。『氷壁』の背後に、井上先生の温かい眼差しが感じられた。

1975(昭和50)年4月、通産省は登山用ザイルに安全基準をつくり、パスしたS(安全)マーク付き製品以外はザイルとして売ってはならないことを義務づけた。私たちが前穂高岳で使ったロープはザイルではないとされた。事件発生以来、実に20年が経過していた。この事件の背景に、日本の主力産業の経済優先主義という不幸な時代があった。

『氷壁』を縁として、私たちは井上先生との親交を得ることになり、カエル会の穂高山行にも参加するようになった。カエル会とは、『氷壁』に出てくる上高地明神の小池に群がるカエルから命名された、井上先生を中心とする山登りの会であった。

1971(昭和46)年には海外旅行のお供もした。9月から10月にかけてのアフガニスタン、ネパールへの取材旅行であった。ネパールでは、私たちがエベレスト街道を、ナムチェバザールを経て3867メートルの高地、タンポチュの僧院まで案内した。この旅行は『星と祭り』のなかに記述されている。

井上先生との親交は年々深まり、カエル会の忘年会では生沢朗、山本健吉、東山魁夷はじめ名だたる作家、芸術家、編集者の方々と寛ぎの刻を過ごした。多くの傑れた知性、教養の士の警咳に接することができたのは、私の生涯において望外のよろこびであった。



氷壁で知名度を上げた前穂高岳東壁